

神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 14 号

師 岡 遺 跡 (1)

(本文編)

REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No.14

MOROOKA(1)

神奈川県立博物館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Nakaku Yokohama Japan

1 9 8 2

師岡遺跡（師岡貝塚）発掘調査報告1

本文編目次

I. 調査目的	1
II. 師岡貝塚の位置と環境	1
III. 調査の概要	
1. 調査区域	3
2. 各トレンチの状態	
(1) 2AB・2DEトレンチ	3
(2) DSトレンチ	7
3. 人工遺物	
(1) 土器(2AB・2DEトレンチ)	9
(2) 石器(")	12
(3) 貝製品(")	14
4. 自然遺物	14
IV. 調査所見	16
注.	18
表1. 2AB・2DEトレンチ出土遺物(貝製品・石製品他)	19
表2. 2AB・2DEトレンチ出土具類	20
表3. ブロックサンプリング箇所における貝類の組成	21
表4. ハイガイ、ハマグリ成育度の分布	22
表5. 2AB・2DEトレンチ出土動物遺存体——魚類・哺乳類・鳥類——	23

実測図目次

第1図. 師岡貝塚および周辺主要貝塚位置図	25
第2図. 調査区域実測図	27
第3図. 2AB・2DEトレンチ壁面実測図	29
第4図. DSトレンチ壁面実測図	31
第5図. 土器拓本(1)	33
第6図. 土器拓本(2)	35
第7図. 土器拓本(3)	37
第8図. 石器実測図	39
第9図. 貝製品実測図(1)	41
第10図. 貝製品実測図(2)	43

調査主催者 神奈川県立博物館長 戸栗栄次

調査期日 昭和55年3月20日～3月29日

発掘担当者・報告書執筆 神奈川県立博物館専門学芸員 神澤勇一

例 言

1. 本報告書は師岡貝塚第1次発掘調査報告書である。編集の都合上、資料編（昭和55年度刊行）と本文編（昭和56年度刊行）の2分冊とした。
2. トレンチ名は調査区域の区画名を以って表示した。
3. 第1次調査の発掘個所中、2DEトレンチ（2D区・2E区）は発掘未了部分を生じたため、昭和56年度に実施した第2次調査で継続、完了した。したがって、2DEトレンチに限り、第2次調査の結果を加えて報告する。
4. 遺跡実測図ならびに各トレンチのレベルは「絶対レベル」で表示した。挿図番号は資料編、本文編共通である。
5. 遺物番号は本文編、資料編共通とし、ゴシック体で表示した。
6. 遺物寸法中、()付けの数字は破損品または欠損部の現存寸法である。

I. 調査目的

神奈川県の北東隅を流れ西方から東京湾に注ぐ鶴見川流域では、縄文時代前期の海進時に鶴見川入江と称される広大な入海が出現し、黒浜期から諸磯b期を中心に、沿岸に30箇所近い貝塚が形成された。師岡貝塚は鶴見川右岸に残されたそうした貝塚の一つで、横浜市港北区師岡町1137番地に存在する。

鶴見川下流域における縄文時代前期貝塚の分布密度の高さは既によく知られているところであるが、近年、横浜市と川崎市の膨張に伴い、この地域は急速に市街地化し、同時に少なからぬ貝塚が消滅や損壊を被った。現存する貝塚の中にも環境の変化により、事実上調査不可能に陥った例も枚挙のいとまない。師岡貝塚の場合もまた同じような恐れが生じつつある。

師岡貝塚は、当地方の縄文時代前期においては例の比較的少ない、台地斜面に形成された、いわゆる斜面貝塚である。この貝塚が何時頃から知られ始めたかは明らかでないが、明治31(1898)年刊行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』には「武蔵国橋本郡旭村師岡——土器(内山九三郎報)^(注1)」という記載がみえる。貝塚の文字は見当たらないけれども、それが本貝塚に係る集落址と出土品を指した可能性は多いと言えよう。推測すれば、師岡貝塚も、明治時代末頃には人々の目に触れていたのではなかろうか。大正時代以降になると、師岡貝塚へ考古学者や郷土史家がしばしば訪れ小発掘や遺物採集を試みている。しかし、今日に至るまでの間、学術的調査が行なわれたことはなく、僅かに酒詰仲男氏の論文と地名表により「鹹水産の貝(注2)より成る諸磯期の斜面貝塚で台地中段に存在する」^(注3)ことが知られるにすぎない。

本館では考古部門の地域研究活動のテーマの一つとして、鶴見川流域の貝塚群をとりあげ、発掘調査、現地踏査、文献調査等を継続してきたが、師岡貝塚については、研究上の必要と前述のような事情により、早急にその正確な時期、規模、構造等を把握し、実態を明らかにする必要を感じた。そこで昭和55(1980)年に第1次調査を、翌昭和56(1981)年に第2次調査を実施した。ここに、第1次調査の結果について、前年度刊行の資料編と今回の本文編とにより、概要を報告する。なお、第1次調査では、貝層の堆積が予想以上に厚かったのと降雨に災いされ、トレンチの一部に若干の調査未了箇所が生じた。この箇所は第2次調査のさい完了したが、性質上、本報告書で取扱った。

II. 師岡貝塚の位置と環境

師岡貝塚は東京急行電鉄東横線大倉山駅の北東約1.3kmの地点にある小台地上に存在し、台地中段に祀られてた熊野神社の拝殿裏手に位置している(第1図・資料編P3上図)。

師岡町と周辺一帯は、30年ほど前までは、鶴見川沿いに樹木に覆われた低平な台地がたなり、低地には水田が広がっていて、その景観に縄文時代前期における鶴見川入江を偲ばせるも

のがあった。しかし現在では、昭和30年代後半を境に道路・住宅・工場等の急増をみ、それに伴う削平や埋立工事により地形の原状が著るしく損われた。貝塚を取り巻くかつての自然環境を察知することはかなり困難である。そこで参考資料として資料編P3（下図）に、未だ旧地形が比較的良好に残っている昭和31（1956）年当時の地形図を載せた。

同図と第1図から判るように師岡貝塚が存在する台地は、鶴見川右岸、北寺尾方面から北西へ突出した複雑な地形を呈する半島状台地の一部で、主要幹線道路「東京丸子横浜線（綱島街道）」の大倉山駅東北方に存在する小さな峠の付近から、東側へ細長く分岐したものである。全長約1km。幅は基部において現在150m前後を測るが、これは北半が切り崩されたため、かつては約300mあり両側面には小さな谷が幾つか入りこんでいた。熊野神社の裏手付近が最も高く、標高42m（低地との比高約35m）、やや広い平坦面をなし、それより東側においては全体になだらかな起伏を示す緩斜面がつづく。また、北側面は鶴見川に、南側面は小さく嵌入した谷をへだてて、この台地とほぼ平行するような形で東へ分岐した二つの半島状小台地に面している。

これらの小台地の根幹をなす大きな半島状台地を、鶴見川は西から東へ大きく迂回し、綱島付近で早瀬川を、駒岡町北方で矢上川を併せ、東京湾に注ぐ。縄文時代前期、両側の低地を覆った広大な鶴見川入江の汀線は、この付近の場合、現標高8～10mの位置に想定してほぼ誤りなかろう。師岡の台地も入江南岸に突出した小さな半島であったと考えられる。

師岡貝塚は旧地形に照らすと、台地南半部の上面に接する北東斜面上部に残されたものである。現在、地表に直径約15mの広さで貝殻が散布し、ちょうどその範囲だけ樹木と藪がなく、斜面に広い空間が出来ている。台地上面は平坦で、北半が削り去られたため、東西幅約50m、南北幅約30mで、平面形が二等辺三角形に近い。西端には標高42.6mの三角点が設置され、それより西約7mをへだてた地点には直径8m、高さ1m弱の規模をもつマウンドがあるが、古墳であるか否かは明らかでない。また、斜面中段、標高35mの等高線付近には、3～5mの幅で斜面を帯状にめぐる幾分平坦な面が存在する。

この台地の周辺には各期の遺跡が多数存在するが、特に縄文時代の前期貝塚をとりあげてみると、師岡貝塚を中心として半径2.5kmの範囲内でさえ、北岸には峯谷貝塚（横浜市港北区新吉田町）、南綱島貝塚（同・吉田町）が、南岸には八幡社裏貝塚・表谷西貝塚・表谷東貝塚（同・篠原町）、宮谷貝塚（同・菊名）、上ノ宮貝塚（横浜市鶴見区北寺尾町）、駒岡貝塚（同・駒岡町）、梶山貝塚（同・梶山）、^{（表4）}上台貝塚（同・上末町）の諸貝塚があり、黒浜期から諸磯b期に形成されたものが主体をなしている。

III. 調査の概要

1. 調査区域

師岡貝塚の調査開始前の状態は、台頂縁辺部直下の東斜面上部、直径約15mの範囲にまばらな貝殻の散布と乱掘の痕跡が各所に認められた程度で、地表の観察とボーリング調査では貝塚のおよその範囲と中心を把握できなかった。しかし、そこだけが周囲とは異なって樹木と藪がなく、地面が露出していることは、地下に厚い貝層が存在し植物の生育を妨げたことを予想させるものである(図版1)。そこで、貝殻の分布密度が比較的高い東西10m、南北14mの範囲をとりあえず調査区域に選び、2m方眼で35区画を設定した。原点は調査区域の北西角で、台地上面に存在する三角点(42.61m)よりN—56°—E・距離29mの位置に当たる。各区(区画)の名称は、原点から南を数字(1~5)、東をアルファベット順(A~G)の記号で区別し、それらを組合わせた。トレンチ名も同様である(第2図)。

第1次調査は貝塚の状態を把握することに重点を置き、調査区域中央に2ABトレンチ(2A区・2B区—以下「区」を省略)、2DEトレンチを、またS列延長上の調査区域北縁2m離れた地点にDSトレンチを設定、発掘した。発掘面積延約20m²である。

2ABトレンチ、2DEトレンチを設定した2列は「第2図調査区域実測図」から判るように、斜面を縦走する帯状の凹所の中心にかかる。傾斜度をみると上半部で15°~20°、下半部で15°~20°、C区、G区ではかなり緩かさをみせるが、D区では30°~35°の急傾斜を示し、小さな段状部をなす。また、G区以東は小さな崖となっていて、高さ約2mの石垣の下に尾根を横断する幅4mの道路が走り、人家が並ぶ。

DSトレンチは、斜面を縦走する帯状凹所の北側斜面にかかっている。藪の根方に貝殻の散布が認められたので2×2mのトレンチを設定し発掘を開始したが、至近距離に存在する大きな樹木の根と藪に妨げられ、結局1.8×1.5mの範囲の調査を完了したに止まらざるを得なかった。

以下、各トレンチの調査結果を述べることにする。なお、それに先立ち2ABトレンチと2DEトレンチについては、中間に未発掘の2C区が介在するが設定意図との関係もあり、層の対比が一応可能であるので一括して扱うことにしたことをお断わりしておく。

2. 各トレンチの状態

(1) 2AB・2DEトレンチ(図版2~3・第3図)

両トレンチは斜面を縦走する褶状凹所底部に近いため、東側のみならず南側へも傾斜している。2ABトレンチ、2DEトレンチにおいては(周辺も含め)、第3図に見られる如く表土がほとんど失われ、土層と貝層の堆積状態もきわめて複雑であった。今述べたような地形条件に

起因するものであろう。しかし、幸い発掘部分における層序は、細部に多少不明な個所を残すが、トレンチ内に存在した各層の特徴、堆積の前後関係、レベル、出土土器型式等により、大略次のようになっていることが判明した。

1＝表土層(腐植土層)、2＝第1混貝土層、3＝黒褐色土層、4＝混土貝層、5＝第2混貝土層、6＝暗褐色土層、7＝関東ローム層。

各層の状態は次のとおりであった。

表土層 —— 第3図 I 層 ——

有機物を含む褐色土層。2 A区西半に薄く堆積するのみで、調査区域内でも斜面上方のA列、B列の一部に存在するにすぎない。ところがこの層は調査区域外では20～30cm前後、斜面下方の2 G区東方の崖面では70cm前後堆積している。したがって大部分が褶状凹所にかかる調査区域の場合、凹所に沿い流出、下方に厚く堆積したと考えて誤りなからう。

2 A区の表土層からは遺物は全く検出されなかった。

第1混貝土層 —— 第3図 II a・II b 層 ——

貝殻の混入が比較的多い有機質の黒褐色土層。全般に30～60cmの堆積を示すが2 D区では20～30cmと薄くなっている。これは2 D区が約35°の急斜面に当たるため、一部が崩壊し去ったものであろう。

第1混貝土層は、西端の2 A区を除き事実上の表土層であり、地表下20～30cm付近までは攪乱により原状を失っている。第3図中、II aは攪乱部分、II bは原状を残す部分である。ただし2 E区においては確実にII b層と判定しうる部分がなく、直下に堆積する混土貝層(IV a層)上面まで、II a層同様か、二次堆積に類する状態が続いていた。この点については、若干問題があるので、後に触れることとし、原状を保つII b層に限って記述を進めたい。

II b層＝混貝土層ではあるが、部分により貝殻の包含量に粗密の差があり、堆積の厚い2 A区・2 B区では混土貝層または純貝層に近い小ブロックが点在、斜面部分にも同様な傾向が認められたが、崩落・土砂の移動等により規模と形状は明確に把握できなかった。

本層に包含された貝類は二枚貝10種類・巻貝7種類、合計17種類である(表2)。数的にはハイガイを主体とする二枚貝が90%以上を占め、ハマグリ、アサリ、シオフキ、オキシジミ等が比較的多い。巻貝は小型のアカニシが多少目立つ程度である。貝殻の遺存状態は全般に悪く、破碎した小破片が大半を占めている。貝殻以外の動物遺存体の出土は稀で、種類はエイの一種が知られる(表5)。

出土遺物は土器破片のみで、小型破片少数が散漫に出土した。総量は平箱(70×45×10cm大)約1個分で、後述する第4類土器(諸磯b式土器)、第5類土器(諸磯c式土器)、第7類土器(勝坂式土器)、第8類土器(阿玉台式土器)等を含む。主体的存在は第4類土器で、2 A区、2 B区ではほぼ単独に存在したが、2 D区では第7類土器、第8類土器の混入が目立った。

黒褐色土層——第3図Ⅲ層・Ⅲ——

有機質の黒褐色土層。組成、質感および色調において、上部混貝土層との間に差を見出し難い。貝殻包含の有無を除けば、同じ土層と見做すべきものと考えられる。この層は2D区、2E区南半で第1混貝土層と混土貝層の間に凸レンズ状に嵌入、南側斜面を縦走する褶状凹所へ向けて厚さを増し、トレンチ南壁付近で15~20cmの堆積を示す。

遺物は全く出土しなかった。

混土貝層——第3図Ⅳ層（Ⅳa~Ⅳd）——

有機質の黒褐色土が混った混土貝層。師岡貝塚の中心をなす層で、2A区上方の斜面から始まり、2E区以東に及ぶ。2A区・2B区においては30~70cm、2C区~2D区にかけ最大の堆積を示し100~120cm、2E区においても70cm前後堆積している。この層も単純な混土貝層ではなく、大小多数のブロック状貝層から成り立ち、斜面傾斜度、堆積面の凹凸その他の条件により、原状を一応残す個所と自然崩壊に原因する変形個所が混在する。したがって同一発掘区内においても土砂・有機物の混入量や貝殻の堆積密度の差が少なくない。しかし各部分の堆積状態、貝層相互の前後関係および貝層中に含まれた土器の差異から、この層は一応Ⅳa~Ⅳdの4層に細別することが出来、さらにⅣa層とⅣb~Ⅳd層の二群に区分するのが妥当と考えられる。

以下各層の説明に移るが、Ⅳa層については他の3層とは異なる点があり、記述の都合上Ⅳb~Ⅳd層を先に取り上げたいと思う。

Ⅳb層=黒褐色土を多く含んだ混土貝層で、純貝層に近い貝殻の小ブロックも一部に存在した。実質的には混貝土層と大差がない。貝殻も破碎された小片が多く、Ⅳc層、Ⅳd層に比べ遺存状態は一段劣り、全体に汚れた外観を呈する。Ⅳb層は2B区より始まり、2C区、2D区を中心に厚さ30~60cm前後堆積しているが、2E区では不鮮明になり、末端は不明である。

Ⅳc層=少量の黒褐色土、砂粒、黒色有機物を含んだ混土貝層で、全体の色調がやや黒ずんでいるが、層の緊りは固い。貝殻も小破片が少なく、二枚貝では貝殻が合わさったままの例が目立つなど遺存状態は良好である。Ⅳc層は、第3図中2DEトレンチ西側壁面実測図に見られるように、Ⅳb層とⅣd層の間に凸レンズ状に嵌入している。上部末端が2c区内にあることは明らかであろう。2D区~2E区の南半に堆積、南側へ急激に厚さを増し、最大約90cmを示すが、2E区との境界付近から鮮明さを失い、消滅している。

Ⅳd層=Ⅳc層同様、黒褐色土・砂粒・黒色炭化物等を含むが、混入量かはるかに少いたため色調にも明瞭な差が認められる。純貝層に近い貝層で、貝殻の遺存状態も良好であった(図版4-(1)・(2))。Ⅳd層は明らかに2A区より更に上方から始まり、2E区以東へ及んでいる。2C区・2D区付近の堆積が最も厚く60~70cmを測るが、2E区で急激に厚さを減ずる。なお、北側壁面に現われた小さな落込み部は腐蝕した樹木の根に貝殻が転落したものらしい。

Ⅳb~Ⅳd層を構成する貝類は、二枚貝12種類・巻貝7種類、合計19種類である(表2)。数

的には二枚貝が85~90%程度を占める。主体をなすのはハイガイで群を抜いて多く、ハマグリ、シオフキ、アサリ、オキシジミがこれに次ぐ。成長度は全般に幼く、特にハイガイとハマグリについては中型、小型の個体に限られると言ってもよい。しかし、オキシジミ、シオフキ、カガミガイ、アサリでは中型、大型の個体が普通である。

層別にみた種類の組成、各種類における成長度の比率は、IV b~IV d層を通じほぼ同様な傾向にあるが、例えば2D区IV b層では大型のハマグリが目立ち、同IV d層下半部ではハイガイ、ハマグリともごく小型の個体が集中し、同IV c層下半ではマガキ、アカニシが他層に比べ多いなど、部分により幾分差が認められる。

検出された貝類以外の動物遺存体としては、魚類ではマダラトビエイ・クロダイ・コチ・エイの5種類、哺乳類では、シカ・イヌ・タヌキの3種類がある(表5)。ただし出土数は少ない。

IV b~IV d層出土の遺物の種類は次のとおりである。土器破片(平箱約4個分)、打製石斧、礫器、磨石、貝刃(表1)。

土器は、10余例を除きすべて第4類土器(諸磯b式土器)で、これに第6類土器(浮島式土器)が少数伴出した。ほかにIV d層下端から暗褐色土上端付近で、第5類土器(諸磯c式土器)が数片検出されたが、本貝層との直接的関係は認め難い。

IV a層=黒褐色土と砂粒・灰・炭火物等を含んだ混土貝層。IV b層と酷似した状態を示すが層自体は固く緊り、他の3層に比べ獣骨、魚骨を多く包含する。貝殻の遺存程度は概して良好と言えるが、二枚貝の殻が接合した状態の遺存例は僅かであった。この層は、2E区西端の東約50cm付近からIV d層を覆う形で凸レンズ状に堆積、東端で約65cmの堆積を測る。

IV a層を構成する貝類は二枚貝12種類・巻貝10種類、合計22種類。二枚貝が主体をなしており、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミ、シオフキが多い点は変わらない。しかし、マガキ、カガミガイ、ミルクイの出土率が他層より高く、巻貝でも大型、中型のアカニシが相当量(明確な群集状態ではないが比較的密に)混り、ナガニシ、イボニシ、バイ、ツメタガイ、スガイ、イボキシヤゴ、アワビ等、他層では稀または検出されなかった種類を含むなどの点で、貝類の組成に幾分差異がある。なお、アワビの出土例数は3個体。いずれも小型の個体であるが、当時の周辺水域では棲息しない点で注目すべきものと言えよう。

貝類以外の動物遺存体としては、魚類ではクロダイ、ボラ、スズキの3種類、哺乳類ではシカ、イノシシ、タヌキ、ウマ(?)の4種類、鳥類ではトリ(種名不詳)の1種類が知られた。このうち哺乳類は、他時期の貝塚に比べれば出土数は比較にならぬほど少ないが、IV b~IV d層よりも出土数が目立って多い(表5)。

出土遺物は次のとおりである。土器破片(平箱約6個分)、打製石斧、礫器、打製石鎌、貝刃、貝製搔器、貝輪、黒珪石剥片(表1)。

本層は、上端部に第5類土器が若干混入するが、主体をなす土器は第7類土器(勝坂式土器)で、これに第8類土器(阿玉台式土器)が伴出する。いずれも大型破片が多く、特に2E区東端

付近では累々と層をなすような状態で集中的に存在した。7類土器と8類土器の比率は正確には示せないが、この部分に関する限り8類土器は30～35%程度になろう。

第2混貝土層——第3図V層——

少量の貝殻が混った有機質の黒褐色土層。組成、質感および色調は第1混貝土層（II層）に酷似するが、層の緊りがはるかに強い。上端付近では貝殻を多く含むが破碎した小破片が目立ち、下半になるとほとんど黒褐色土層（III層）に近い状態を示す。この層は第3図に示したように、少くとも2列内では2C区より始まることは誤りなく、平均25～30cmの堆積で2E区以东まで延び、他層と同様、南側へも傾斜している。

遺物は土器破片のみで、それも、平箱約4分の1を満たす程度の量が出土したにすぎない。土器は、上端から出土した第III類土器（諸磯a式土器）破片数片を除き、すべて第II類土器（黒浜式土器）である。

暗褐色土層——第3図VI層（VI a・VI b）——

暗褐色を呈するやや粘質の土層。下半部（VI b）では関東ローム土の粒子が混り黄色味を帯びるが変化はきわめて漸移的であり、本質的に異なる点はない。2B区～2D区付近に最も厚く堆積、厚さ100～120cmを測る。

VI層における遺物は尖底土器破片、局部磨製石斧、礫器各1例が、2B区で出土したにすぎなかった。そのうち土器破片は第1類としたものである。本例は尖底部の破片で、IV b層下端から出土した（第7図 157）。しかし周辺に同類の土器破片は全く検出されず、焼土その他の存在も認められなかった。石器2例は、ともにVI層上部（VI a層）の出土で、出土位置とレベルが多少異なるため、I類土器と直接関係するか否かを判断し難い。

関東ローム層——第3図VII層——

本台地の土層の基盤をなす。A区とB区西半では45°前後の急傾斜を示し、B区東半からD区西半にかけほぼ平坦となり、B区東半より先は15°前後の緩傾斜を示している。貝層、遺物包含層がC区～D区に厚く堆積し、現地表面でもこの部分にやや平坦な面が存在するのは、基盤をなす関東ローム層上面の形状によるものであろう。

(2) DSトレンチ（図版3、第2図・第3図）

DSトレンチは貝塚の北側への広がりを調査する目的で、2AB・2DEトレンチ付近を中心とする褶状凹所の北斜面、1D区より2mの距離を置いて設定した。この位置は褶状凹所の縁辺に近いので、地表面が北西から南東へ25°～30°の傾斜をもつ。発掘の結果、本トレンチでも地表下に混貝土層、混土貝層の存在が確認され、それらはさらに北および斜面沿いに北西へ延びることが知られた。

層序は次のとおりである。

1＝表土層（混貝土層）、2＝褐色土層、3＝混土貝層、4＝暗褐色土層、5＝関東ローム層。

しかし、暗褐色土層下半と関東ローム層を除き、全体に乱雑で、同一層内に存在するブロックあるいは層相互の境が明瞭でない。おそらく急斜面のため、土砂、貝殻が繰り返して激しく崩れ落ちたのがその原因とみられる。

表土層——第4 図 I 層——

貝殻が多量に混った暗褐色を呈する腐植土層。トレンチ北西隅で35cm前後、南側へ堆積が厚くなり、南西隅付近では60cm前後を測る。層の緊りはきわめて軟弱で、包含された貝殻も破碎した小破片がほとんどで、全形を保つものは少い。種類ではハイガイ、ハマグリが多く、オキシジミ、シオフキ、アカニシ等が目立ち、二枚貝が主となっている。遺物は土器破片のみで、前期・中期の土器——第3類土器（諸磯 a 式土器）～第8類土器（阿玉台式土器）——がそれぞれ少数混出したにすぎなかった。

以上の状態と次に述べる褐色土層の存在から判断すると、この層は本来の表土（あるいは混貝土層）とは認め難い。崩落した土砂と貝殻から成る二次堆積層と考えるのが妥当である。

褐色土層——第4 図 II 層——

有機物を含む褐色土層。トレンチ東半に存在し、東壁、南壁付近では厚さ40cm前後の堆積を示す。トレンチ西半には認められないが、堆積状態をみると、もとは西側か、斜面上方にも存在したものが、急傾斜のため下方へ流失、あるいは崩落した土砂、貝殻と混着し、消失したと考えられる形跡が濃厚である。土質、色調とも2A区に存在した表土層（2AB・2DE トレンチ I 層）と差がなく、層の緊りも固い。この層がおそらく本来の表土層であったと考えられる。遺物は全く出土しなかった。

混土貝層——第4 図 III 層——

有機質の黒褐色土が混った混土貝層。台地の傾斜に沿い、北西から南東へ20～40cmの堆積を示すが、僅か1.8×1.5mの小範囲であるにもかかわらず、上面は凹凸が著しく、そのため場所により厚さに大きな差がある。貝層自体も均質ではなく、混貝土層に近い部分や純貝層に類する小ブロックが入り交った複雑な状態となっており、少なくとも小貝層が3層複合堆積していることが伺えるが、発掘面積も狭く、詳細は明らかでない。いずれにせよDSトレンチ内における混土貝層の状態は通常のものとは異なるもので、西壁実測図に現れた形などを見ても、度重なる自然崩壊の結果と考えられる。

本層に包含された貝類は、ほとんど二枚貝で、ハイガイを主体に、ハマグリ、オキシジミ等が多く、特に下半部では遺存状態が良好であった。

遺物はきわめて少なく、土器破片が、平箱約4分の1程度の量出土したにすぎなかった。それらは、上端から出土した混入と思われる第3類土器（諸磯 a 式土器）・第5類土器（諸磯 c 式土器）少数を除き、第4類土器（諸磯 b 式土器）に属するものである。

暗褐色土層——第4 図 IV 層——

暗褐色を呈するやや粘質の土層。前三層と同じく、北西から南東へ厚味を増し、60～90cm堆

積している。下端では関東ローム層の粒子が混入するため黄色味を帯びるが、上下の間に本質的差異は存在しない。また、北西隅付近の上半部に貝殻片が混入しているが、混貝土層ではなく、明らかに攪乱により生じた局部的変化と認められるものである。

本層においても遺物は少なく、第2類土器(黒浜式土器)数片の出土をみたにすぎなかった。
関東ローム層——第4図V層——

2AB・2DEトレンチの場合と同様に本トレンチの基盤をなす。上面が多少起伏をもつ。トレンチ北西隅から南東隅へは平均約20°、東西方向へは約15°傾斜を示し、東壁付近では傾斜がさらに減少する傾向がある。これは2DEトレンチE区東半に存在した緩傾斜面に相当するものと考えられる。

3. 人工遺物

各トレンチにおける出土遺物の全数量は、土器破片＝平箱(70×45×10cm大)約11個分、石器＝7種27点、貝製品＝3種91点、合計118点。ほかに黒旺石剥片32点がある。発掘面積に比べ遺物の出土は少ない。このうちDSトレンチ表土層と混貝土層から出土した土器破片平箱約半個分以外は、すべて2AB・2DEトレンチ内から出土した。この差は発掘面積と発掘地点の状態如何によるものであり、2AB・2DEトレンチの場合でも、大多数が2D区、2E区から出土している。

以下、遺物の記載については2AB・2DEトレンチ出土資料についてのみ、種類別に取り上げることにする。

2AB・2DEトレンチ出土遺物

種類ならびに点数は、土器破片＝平箱10個分強、礫器＝7、局部磨製石斧＝1、打製石斧＝14、敲石＝1、磨石＝1、石皿＝2、石鏃＝1、貝刃＝85、貝製搔器＝1、貝輪＝5である。各種類の層位別出土例数はP19「表1」に、図版と実測図に示した例の計測値等は資料編P5「資料編収録遺物表」に示した。

(1) 土器

すべて破片であるが、形状、文様、胎土、製作手法の特徴により、8類に大別出来る。

第1類土器(図版10・第7図——157)

1例。尖底土器底部破片で、約45°の角度を示す。先端は使用の結果著しく磨滅変形し、直径約2cmの粗い円面をなしている。器面は無文で、へら状器具による粗い研磨痕が縦に走り、砂粒の移動が目立つ。胎土にかなり粗砂を含むが焼成は良く、器壁は固く焼き緊っていて赤褐色を呈する。僅か1例ではあるが、尖底部の形状、胎土その他からみて、田戸下層式土器に比定されるべきものとする。

この土器は2B区暗褐色土層下部(VI b層)より単独で出土したが、付近の別地点に、同期

の遺物包含層の存在する可能性が多い。

第2類土器(図版8・第6図——91、図版10・第7図——127~137)

器面全体に縄文が施こされ、胎土に多量の繊維を含む一群である。無節または単節の粗大な斜行縄文・異条斜行縄文・組紐回転文等を地文に、半裁竹管または幅1cm前後の櫛状施文具を用いたコンパス文・円形竹管押圧文を付けるのが普通である。器形は口辺が多少外反しスムーズに胴部へ移行するものと、頸部がくびれ胴部に膨らみをもつものがある。口縁は平縁または波状口縁で、前者が普通らしい。底は平底と上底の2種類が知られる。胎土中に多量の繊維を含むため、造りが全体にぶ厚で器面に凹凸が目立ち、また焼成も一般に不十分で器壁が脆い。色調は黒褐色ないし暗褐色を呈する。

本類はD区第2混貝土層(V層)から、少数ながら、ほぼ単純に出土した。本類は黒浜式土器に比定できよう。

第3類土器(図版7・第5図——56~59・65、図版10・第7図——140・141・146)

器面上半部に半裁竹管を用いた磨消縄文、連続爪形文、爪形文で充てんした平行線文・曲線等を配し、下半部には斜行縄文が施こされた一群である。絶対数が少ないのと小破片ばかりのため器形を確実に把握し難いが、出土例を見た限り、比較的単純な深鉢形に属するらしい破片が多い。口縁には平縁と波状口縁が知られ、上端に小突起を付けた例(57・59)もあり、その一部は第6類のそれに類似する。底は平底らしい。本類は胎土中に繊維を含まず、器壁の厚さ0.6~0.8cm程度。概して焼成良好で器壁が固く緊り、器面の凹凸も少いが、色調は黒褐色から明褐色まで変化をみせている。

本類は諸磯a式土器に比定してよいと考えられる。

第4類土器(図版7・第5図—41~55・60~64・66~71、図版8・第6図—72~90)

主として胴上半部に竹管文で構成された文様帯をもつ一群。半裁竹管による平行直線文、平行曲線文(ともに平行線内に半裁竹管の刺突による爪形文を加えた例が普通)、爪形文を組み合わせた複雑な文様が多い。縄文を地文にした例とへら磨きした器面に直接描いた例とがあるが、前者が過半数を占めている。また単節の斜行縄文だけを施こした例も少数ながら存在する。器形は、口辺部が多少外反した深鉢形が一般的らしい。そのほか、縄文を地文とし、細い粘土紐を貼付けた浮線文による直線文と曲線文で文様が構成された土器があり、浮線上面には斜めに細かい刻目が加えられている。この種の土器の器形は、口辺部が内湾気味に張り出したキャリパー状の深鉢形に限られる。いずれの種類も器高30cm前後が普通らしい。胎土中に繊維を含まず、焼成も概して良好で赤褐色ないし暗褐色を呈する例が多い。

本類は混土貝層(IVb~IVd)層の主体をなす土器で、上述の諸特徴により、諸磯b式土器に比定できる。

第5類土器(図版8・第6図——97~100)

半裁竹管による平行線を密集させた条線状の文様が一面に付けられた一群。その上に小型の

円形貼付文(98)や刻目を施こした細い棒状貼付文(99・100)を加えた例も知られる。出土例数が少くしかも小破片のみであるため詳細不明であるが、他遺跡出土例によれば、口辺部が外反または内湾気味に膨らむ器形で、底は平底と思われる。

本類は独特な文様から諸磯c式土器に比定できよう。第1混土層下部(IIb層)と混土層(IVb～IVd層)の接する付近から混入の状態ですら出土したにすぎないが、遺存状態が良く、DSトレンチにおいても少数ながら検出されているところから、周辺に同期の貝層または遺物包含層が存在する可能性もある。

第6類土器(図版8・第6図——92～96・99～104)

混土層(IVa～IVd)中から出土した当地域における異質の土器を便宜的に一括した。出土例数は少ないが、A、B2群に分けて扱うことにしたい。

A群＝貝殻文が付けられた土器(92～96)。細いへら描きの平行沈線の間を二枚貝(アナダラ属以外)の腹縁を用いた押引文で埋めた文様と点列文を交互に配列したもの(92)と、アナダラ属の貝殻(ハイガイまたはサルボウ)の腹縁を鋸歯状に連続押捺した文様をめぐらせたもの(93～95)とがある。このうち、94では上端にアナダラ属以外の二枚貝腹縁を用いた同一手法の文様が併用されている。少数例のため確かではないが、器形は深鉢形であろう。器面は平滑であり、胎土中に繊維を含まない。焼成も良く、器壁が固く焼き緊っている。A群は、その特徴的な貝殻文から、関東地方北東部を中心に分布する浮島式土器またはその系統に属する土器と考えられる。

B群＝96～101その他を本群としたが、小破片のため特徴を見定め難く、直接比定または関係する土器の決定を保留する。ただ101については、器面を縦走する太目の棒状貼付文の上に、半裁竹管によるらしい爪形の刻目がまばらな間隔をもって加えられ、器面がきわめて粗雑で胎土に多量の粗砂と雲母片を含むことを付記しておこう。

第7類土器(図版9——116～126)

太い粘土紐を貼付けた隆線による直線文と曲線文を中心に、幅の広い押引文、連続刺突文で構成された雄大かつ複雑な文様が付けられている一群。器形は一般に甕形、深鉢形で、ほかに筒形と浅鉢形と思われる破片がある。器壁の厚さは1cm前後。胎土中に細かな石英粒と比較的多量の粗砂を含むため、器面に研磨調整が施こされているにもかかわらず、やや粗雑な感をもつ例が少なくない。本類の示す特徴は明らかに勝坂式土器のそれと一致し、同式に比定することが出来る。

本類は2E区混土層(IVa層)中に、後述する第8類土器と混在したが、多数を占めた。いずれも大型の破片が多く、層をなすような出土状態を示し、破片の遺存状態は良好で、位置の移動に伴う損耗の形跡は認められない。この点は2E区混土層出土土器が、ほとんど第7類土器・第8類土器に限られ、合わせて平箱約6個分が出土した点とともに注目される。

第8類土器（図版9——106～115）

第7類土器と同じく粘土紐を貼付けた隆線による直線文と曲線文に押引文を加えて構成された文様が付けられている一群。しかし、本類のそれは第7類土器に比べ全体にかなり粗略であり、隆線文の断面は三角形を呈して稜をもち、押引文も幅が狭く隆線文で区画された器面全体に付けられることはまず無い。口辺部が直立または幾分膨らみ気味に張出して段状を呈する深鉢形の器形が普通である。口縁は平縁と大きな波状口縁の2種類があり、いずれの場合も、方形に似た比較的大型の把手が付く。胴部以下は文様が少ない代り器体の補強と装飾を兼ねて付けたと考えられる浅い連続押捺文帯が何段もめぐっている。器面は粗く研磨整形されているが、胎土に多量の砂粒と雲母片を含むため粗面となり、焼成も不良で、一般に暗灰褐色ないし暗灰色を呈し、全体に粗雑な印象が強い。

本類は明らかに関東地方東部に分布の中心をもつ阿玉台式土器に比定することが出来る。なお、東京湾西部沿岸では、勝坂式土器に阿玉台式土器がしばしば伴出することが知られているが、2E区では、むしろ共存に近い状態であった。師岡貝塚、または2E区混土貝層(IV a層)だけにおける特殊な状況かも知れないが、一応注意する必要がある。

以上に1類～8類土器の概要を説明したが、ここでそれらが比定される土器型式と出土層位との関係を整理すると次のようになる。なお、DSトレンチのそれについては明確な結果が得られなかったので、調査の中心になった2AB・2DEトレンチのみを採り上げた。

第1類土器＝田戸下層式土器 暗褐色土層(VI b層)。

第2類土器＝黒浜式土器 第2混貝土層(V層)。

第3類土器＝諸磯a式土器 第2混貝土層(V層)上端～混土貝層(IV b・IV d層)下端部に散在。

第4類土器＝諸磯b式土器 混土貝層(IV b～IV d層)。

第5類土器＝諸磯c式土器 混土貝層(IV b・IV d層)上端～第1混貝土層(II b層)下端に散在。

第6類土器＝浮島式土器 混土貝層(IV b・IV c・IV d層)。A群は第4類土器に共伴。B群は一部不明。

第7類土器＝勝坂式土器 混土貝層(IV a層)。

第8類土器＝阿玉台式土器 混土貝層(IV a層)。第7類土器に共伴。

(2) 石器

礫器（図版12・第8図——12～15）

礫の一端に粗雑なぶ厚い刃をもつ石器。出土例数7例。器体と大きさは一定しないが、最大例は12、他は14・15程度で、剥片石器に似た2例を除き、器面はほぼ自然面である。刃は、主に片面からの敲打で付けられるため、片刃または片刃状を呈する。7例中6例が混土貝層(IV b～IV d層)出土、剥片石器に類する残り1例はE区混土貝層(IV a層)上端の出土で、時期

を確定し難い。

局部磨製石斧（図版11・第8図——1）

扁平な礫の一端と両側面を敲打整形し、刃先だけ両面から粗く研磨した石斧の刃部破片。出土例数1例。刃先は断面が蛤刃状を呈し、鋭い。刃部以外は自然面のままである。

本例は暗褐色土層（VI a層上部）から単独出土した。器形、製作手法において早期の所産と考えられるが、尖底土器（図版10・第7図——157）との関係の有無は不明である。

打製石斧（図版11——2～9）

出土例数14例。うち完形品は4例である。器体の平面が長楕円形、長方形、あるいは撥形に類するものを含み、一定の形状を見出し難い。また両面と側面を敲打整形した例と片面に自然面を残す例とがある。素材は凝灰岩、硬砂岩、礫岩、石英片岩、輝緑岩等が知られる。

すべてE区出土で、2・3・6・7は混土貝層（IV b～IV d層）、他は混土貝層（IV a層）から出土した。前者は出土層位とレベルにより前期の所産とみて誤りない。他の10例は、混貝土層（II b層）と混土貝層（IV a層）が接し、多少攪乱気味の個所から出土きており、時期を明確に判定し難いが、形態と製作手法からみて中期に属する可能性が多い。

敲石

出土例数1例。平面不整楕円形を呈する長径8.5cm、短径6.7cm、厚さ4cmの礫を全く加工せず使用したもの。一端が敲打により磨滅している。出土層位はE区混土貝層（IV a層上端）付近。中期に属する可能性が多い。

磨石（図版12・第8図——16）

出土例数1例。平面扁円形で、長径8.1cm、短径6.3cm、厚さ3.8cmの比較的小型の磨石。使用面の周囲は軽く面取りされ、中央に直径約1.5cm、深さ約0.3cmの浅い凹みが付けられている。多孔質安山岩製。E区混土貝層（IV b層）の純貝層に近いブロック状部分で、諸磯b式土器に伴出した。

石皿

出土例数2例。いずれも多孔質安山岩製石皿の小破片である。1例は縁高5.4cm、縁上面の幅がほとんど無い。小型の石皿と推定され底面を凹石として使用、凹所が3箇所に付いている。他の1例は、石皿側面から剥落し破片であって、器面のカーブを見ると、かなり大型の石皿の破片であるらしい。いずれもD区混土貝層（IV c層）出土である。

石鏃（図版15——39）

出土例数1例。平面逆V字形の薄手の打製石鏃で、両面とも細かな押捺剥離により美しく整形されている。完形品で素材は玉髓。出土層位はE区混土貝層（IV a層）である。

黒珥石剥片（図版15——41）

微細な軽石粒を含む黒色部分の多い黒珥石であるが透明部分は澄み、質は良い。出土例数34例。平面5×4cm大、厚さ0.9cmから2×1cm大の小型剥片までである。当然ながら形は不揃いで

あるが、大部分にバルブ、ネガティブバルブ、リング等、人為的敲打の痕跡がある。しかし、未製品と認められる例はない。ただし、前述の最大例と他3例には、割れ口に生じた鋭い稜の部分の一部歯こぼれ状を呈するところから、一種の搔器として使用された可能性が考えられる。

出土層位はすべてE区混土貝層(Ⅳa層上半部)で、特にトレンチ東壁面寄りの地点では、数個が塊って存在するような傾向が認められた。こうした出土状態は、他層から黒珉石剥片が全く検出されなかったことと併わせて、注目される。

(3) 貝製品

貝刃(図版13・図版14. 第10図——17~32)

二枚貝の腹縁に、殻の内面側から加えられた、押捺剥離による粗い鋸歯状の刃が付いている貝製刃器。出土例数85例で、そこうちハマグリ製62例、カガミ貝製8例、オキシジミ製8例、シオフキ製7例。ハマグリ製貝刃が約73%を占め、それも大部分が大型のハマグリの殻を使用したものに限られると言ってもよい。明らかに素材の意識的選択が行なわれたと考えられる。刃の位置と幅は、腹縁全体に及ぶ広いもの(17~19・29・30・32)、左また右に片寄っているもの(23・25)、腹縁中央だけに付いているもの、の3種類に大別され、前二者が多い。出土層位は85例中71例が混土貝層(Ⅳb~Ⅳd層)である。Ⅳa層がE区にしか存在しないという条件を考慮しても、前期に目立った存在を示すと言えよう。なお、師岡貝塚出土の貝刃は、素材の種類と比率、器体の大きさ、製作手法において梶山貝塚(横浜市鶴見区梶山所在=花積下層期)出土例とほぼ同じ傾向を示している。

貝輪(図版15・第9図——33~37)^(注5)

イタボガキ製で、出土例数5例。うち完形1例(33)、全形を伺い得るもの1例(34)、小破片3例である。器体周縁、器体内外面、および穿孔周縁は粗い研磨調整が施こされているが、33のみは穿孔が小さく、穿孔周縁の整形も不十分であり、未完成品かも知れない。出土層位は5例ともE区混土貝層(Ⅳa層)であり、勝坂式土器・阿玉台式土器に伴出した。

貝製搔器(図版15・第9図——38)

マガキの殻で製作された特異な貝製品。出土例数1例。平面が殻の長軸に沿って長方形を呈し、内外面と周縁が粗く研磨整形されている。長辺の一方が著しく薄くなっており、この部分に使用による磨滅と歯こぼれ状の小さな凹凸が認められる。形状と使用痕からみて、一種の搔器と考えてよかろう。出土層位はE区(Ⅳa層)である(なお「資料編」では本例に異形貝製品という名称を与えたが、「貝製搔器」と訂正する)。

4. 自然遺物

(1) 2AB・2DEトレンチ出土動物遺存体

2AB・2DEトレンチ出土の動物遺存体としては、第1混土貝層(Ⅱb層)、混土貝層(Ⅳ

b～IV d層・IV a層)、第2混貝土層(V層)から、貝類22種、魚類8種、哺乳類5種、鳥類1種が知られる。

貝類(表2～表4)

「表2」に示したように、二枚貝12種、巻貝10種、合計22種が検出されたが、実数では二枚貝が各層で主体をなし、ハイガイを中心に、ハマグリ、シオフキ、オキシジミ等が大多数を占めている。ただ、E区からD区の一部に存在する混土貝層(IV a層)においては、同様な傾向が認められる一方で、アカニシ、ナガニシ、イボニシ、バイ、スガイ、イボキシヤゴ、ウミニナ、ヘナタリ等、他の層でごく少数か全く検出されなかった種類が混るといった特徴が認められる。この点については、前述のようにIV a層の時期が明らかに中期に属するので、海進から海退への転換に伴う自然環境の変化と関係するものと考えられる。哺乳類の遺存体がこの層に多いことからその可能性は多分にある。

なお、IV a層からはアワビ3例が検出されたが、それらは自然環境が多少変化したにせよ、師岡貝塚周辺で棲息した可能性はなく、外洋に近い地域からもたらされたものと考えざるを得ない。

次に今回の調査においては、発掘区域中最も状態の良い部分、C区に接したB区とD区の一部、平面1×1mの範囲を選び本貝塚の中心をなす混土貝層(IV b～IV d)層についてブロックサンプリング調査を実施した。理想的には、第1混貝土層(II b層)、第2混貝土層(V層)も対象にしたかったが種々の悪条件が重なり実現できなかった。調査方法はレベルと貝層内のブロックの堆積状態を勘案しつつ試料を採取する方法をとった。ただ、何ぶん資料の量が多く、現時点ではそのすべてを公表し得る段階に至っていない。そこで、本稿では中間報告的にその結果の一部を示すことにした。

「表3」がそれである。貝種の組成、種別の比率は発掘中の所見によく一致しているが、小範囲内の同一層内においても、例えばハイガイ、シオフキ、アサリに見られるように、試料ごとに比率にかなりの差が存在する。

この傾向は発掘調査中も注意に上っていたことで、それを具体的に裏付ける結果であった。貝層の一部にこうした特定の種類が集中する事実は、捕獲時期の差か、捕獲場所の違いを反映するものであろう。それはE区混土貝層(IV a層)の場合とは全く事情が異なっている。

「表4」は「表3」に示したブロックサンプリング試料より、出土例数の多いハイガイとハマグリを2種類を選び、殻長の大小により成育度の分布を調査した結果である。表から知られるように、いずれにおいても中型、小型に属する個体が圧倒的に多く、成育度は全般に低いと言えよう。この傾向はハイガイ、ハマグリ以外の種類の場合も同様である。

魚類(表5)

魚類は種類が少なく、「表3」に示したように8種類を検出されたにすぎない。中心となる混土貝層(IV b～IV d)層では、マダラトビエイ、クロダイ、カレイ(類)、コチ、エイが知られ

るが、この中ではクロダイ、コチ、エイが比較的目立つ。なお、一部資料は現在同定準備中であり、ブロックサンプリングの結果と合わせれば多少種類の増加と種類別の多少が明らかになるであろうが、大勢に変化はないと考えられる。

哺乳類・鳥類（表5）

混土貝層（Ⅳb～Ⅳc層）では、僅かにシカとイヌが知られるにすぎない。これに対し中期に属する混土貝層（Ⅳa層）では、タヌキとウマ（?）が加わり、またシカ、イノシシの骨の出土数も多い。資料の絶対数が少ないため断定は危険であるが、魚類の種類も若干異なった傾向がみられることから、やはり自然環境の変化による影響が反映されているのかも知れない。

なお、Ⅳa層からはウマの肢骨らしい骨片が出土したけれども、縄文時代にはいまのところウマが存在した確証はなく、出土位置も攪乱部分が多い混土貝層（Ⅱa層）に接した個所で、後世の混入である可能性が多い。

(2) D S トレンチ出土動物遺存体

本トレンチの場合、動物遺存体の検出が期待できるのは第Ⅰ層＝表土層（混土貝層）と第Ⅲ層＝混土貝層であるが、ともに自然崩壊による混乱が著しく、貝類以外の動物遺存体——魚類・獣類・鳥類——は全く出土しなかった。また貝類についても、混土貝層のごく一部に純貝層に近い小ブロック状貝層が認められたとは言え、主体をなす土器型式は不明である。したがって、全体的に見た場合、2AB・2DEトレンチの場合と同じく、ハイガイ、ハマグリを主体にオキシジミ、シオフキ、カガミガイ等の二枚貝が多数を占めることと、大型のアカニシが比較的多く混在したことが知られたに過ぎない。このような貝層の状態は、この地点の地形的位置を考えた場合、止むを得ないところであろう。

Ⅳ. 調査所見

以上に第1次調査の結果の概要を述べた。調査の前例を欠くためデータが無く、日程、天候等にも制約され所期の目的を十分達成するまでには至らなかったが、幸い貝塚の位置確認が出来たのを始め、時期・規模・構造等に関する幾つかの手掛りが得られた。

次にそれらを概括、二三の所見を述べて結語に代えることにする。

師岡貝塚は「縄文時代前期（諸磯期）の斜面貝塚で、台地中段に存在する」と伝えられてきたが、今回の調査により従来の所説をほぼ確認した。しかし、位置は台地中段ではなく、上面に接した東斜面上部であり、またそれが混土貝層から成る諸磯b期の貝層を主体とするものであることが明らかになった。ただし発掘面積は約20㎡にすぎず、貝塚の平面規模の把握は果たせなかったが、各トレンチにおける貝層の堆積、地表面の状態および再度実施したボーリング

調査の結果を総合すると、2AB・2DEトレンチ付近を中心に、直径15～20m前後と推定される。しかしDSトレンチの貝層堆積状態は、褶状凹所に向いつつも方向が異なるうえ上方から落下堆積した形跡を示し、また2AB・2DEトレンチの間には貝層が途切れた個所も存在する。したがって師岡貝塚の主体部が褶状凹所付近に存在するとしても、実際には台地上の数箇所から貝殻その他の食糧残滓が投棄され、周辺に小貝層が形成されることは十分あり得るので、DSトレンチ混土貝層のもそうしたものの一つと考えてよいかも知れない。

次に2DEトレンチE区に堆積する混土貝層(IV a層)の問題がある。第3図に示したように、この層は諸磯b期の混土貝層(IV b・IV d層)上に堆積、直上の混貝土層(II a・II b層)も明瞭性を欠いている。勝坂式土器と阿玉台式土器の大型破片の集中的包含、伴出石器類の特徴、貝層自体の様相にしても混土貝層の他の部分に比べ、かなり異なる。これらの諸点から、IV a層は単に諸磯b期の混土貝層の一部に中期の遺物が混入した状態とは理解し難く、諸磯b期の貝層の一部に重複した勝坂期の貝塚と考えられる。

一方、土器に関連して、二つの注目すべき所見がある。一つは、貝塚を伴うか否かを別に、田戸式土器、黒浜式土器、諸磯a式土器、浮島式土器、諸磯c式土器、勝坂式土器、阿玉台式土器が出土したこと。これにより、師岡台地は、単に諸磯期のみでなく、縄文時代早期中葉・前期前半～中期前半にかけ、断続的ながら繰り返し生活の場に選ばれていたことが知られるに至った。他の一つは、他地域の土器の共伴。すなわち、混土貝層IV b～IV d層において諸磯b式土器に浮島式土器が、同・IV a層において勝坂式土器に阿玉台式土器が相当量伴出した点である。いずれも南関東地方東部、霞ヶ浦周辺に分布の中心を有する型式であり、特に後者の場合、共伴とは言えぬ程の出土数を示している。関東地方東部との交渉がかなり密であったことを反映するものであろう。IV a層から出土したアワビ3例にしても、当時の師岡周辺海域のような東京湾北半の入江では棲息しない種類であり、三浦半島または房総半島の東京湾口に近い岩礁性の海域からもたらされたとしか考えられず、土器と同様に他地域との交渉を暗示する資料と言える。

生活様相の復原に不可欠な動物遺存体の種類と種別構成については、ブロックサンプリング試料が整理未了のため、遺憾ながら本稿では報告できない。しかし、これまでに知り得た範囲では、魚類・貝類は入海の小湾入部、主に泥底から砂泥底の海域に棲息する種類のみであり、周辺の諸貝塚と同様な傾向が認められる。ただ、前期、中期を問わず漁労具の出土を全く見なかった。この点は単なる偶然的結果か、或は特別の意味をもつものか、一応検討を要するところである。

きわめて簡単ではあるが、これで第1次調査の結果概要を終える。もう少し触れるべき点もあるが、多少検討を要するところが残っているので、それらについては第2次発掘調査の結果を報告するさい取り上げたいので、ご了承をお願いする。

末尾になったが、本調査については熊野神社宮司石川正人氏より格別のご配慮があり、また、動物遺存体の同定では早稲田大学講師金子浩昌氏より御教示を得たのを始め、作業に当たった学生諸氏、地元の方々、関係機関から多大なご援助を頂いた。巻末に芳名を記るさせて頂き、厚く感謝の意を表する次第である。 (神澤勇一)

注

- (1) 「日本石器時代人民遺物発見地名表」 第2版 東京帝国大学編 明治31(1898)年。
- (2) 酒詰仲男「神奈川県下貝塚調査概報」 人類学雑誌53巻3号 昭和13(1938)年。
- (3) 酒詰仲男「日本貝塚地名表」 土曜会刊 昭和34年(1959)年。P.115。
- (4) 「菊名貝塚」は、詳しくは、宮谷貝塚と上ノ宮貝塚の2地点にわたるものである。
- (5) 厳密には「ハマグリ」と「チョウセンハマグリ」の2種類が存在。
- (6) 神澤勇一「梶山遺跡(2)」 神奈川県立博物館発掘調査報告書 第2号 昭和44(1969)年。

発掘調査関係者名簿 (順不同、敬称略)

一般協力者＝石川正人(熊野神社)、金子浩昌(早稲田大学)、遊佐和敏(東邦医科大学)、横出昭一(目黒区立美術博物館設立準備事務室)、宮川芳正、中谷俊吾、山中信夫他(師岡小学校)。

学生＝矢野慎一・松崎元樹・榊渕規章(国学院大学)、笹原昭一(明治大学)、高正毅(東海大学)、河村美樹子(立教大学)、石谷昌信・湯川英一・田谷憲治(明治学院大学)。

関係機関＝横浜市教育委員会、港北区役所、神奈川県港北警察署。

神奈川県立博物館＝川口徳治朗、中野万年、渡辺明、平本紀美男。

〔報告書作成協力者〕

横山昭一、矢野慎一・相沢智子・菊田成海(国学院大学)、宮脇藤子(昭和女子大学)、鈴木紀子(学習院大学)、松島義章、井上久美子(本館学芸部)。

表1 2AB・2DEトレンチ出土遺物(貝製品・石製品他)

トレンチ	種類	層位	表土層 I	第1混貝土層 II(IIb)	混土貝層		第2混貝土層 V	黒褐色土層 III	暗褐色土層 VI	計
					IVb~IVd	IVa				
2AB-T	貝	刃	5	0	7	--	0	--	0	12
	礫	器	0	0	0	--	0	--	1	1
	局部磨製石斧		0	0	0	--	0	--	1	1
2DE-T	貝	刃	1	0	64	8	0	0	0	73
	貝	輪	0	0	0	5	0	0	0	5
	貝製搔器		0	0	0	1	0	0	0	1
	礫	器	0	0	5	1	0	0	0	6
	打製石斧		0	0	4	10	0	0	0	14
	敲石		0	0	0	1	0	0	0	1
	磨石		0	0	1	0	0	0	0	1
	石皿		0	0	2	0	0	0	0	2
	石鎌		0	0	0	1	0	0	0	1
	石燻石剥片		0	0	0	32	0	0	0	32

注. 1. 層位記号・番号は「第3図2AB・2DEトレンチ壁面実測図」に同じ。

2. 層位欄中「表土層」には第1混貝土層IIa出土遺物、表面採集遺物を含む。

表2 2AB・2DEトレンチ出土貝類

種名		層位	第1混貝土層 II b	混土貝層		第2混貝土層 V
				IV b・IV c・IV d	IV a	
二枚貝	ハイガイ		++	++	++	++
	サルボウ		(+)	(+)	(+)	(+)
	ハマグリ		++	++	++	++
	アサリ		+	++	+	++
	シオフキ		+	++	++	+
	オキシジミ		+	++	++	+
	カガミガイ		+	+	+	+
	ミルクイ		(+)	+	(+)	—
	マテガイ		—	+	(+)	+
	カリガネエガイ		(+)	(+)	+	—
	マガキ		+	+	++	+
	イタボガキ		—	(+)	+	+
巻貝	アカニシ		+	(+)	++	—
	ナガニシ		—	—	+	—
	イボニシ		(+)	—	+	—
	ツメタガイ		(+)	(+)	+	(+)
	バ　　イ		—	+	+	(+)
	ス　　ガイ		(+)	+	+	(+)
	イボキシヤゴ		(+)	+	+	+
	ウミニナ		+	+	+	+
	ヘナタリ		+	+	+	+
	ア　　ワ　　ビ		—	—	(+)	—

注 1. 層位欄の数字・記号は「第3図 2AB・2DEトレンチ壁面実測図」に同じ。

2. 本表中の記号表示は次のとおりである。++=出土多。(+)=出土少。—=出土無。

表3 ブロックサンプリング箇所における貝類の組成

種 別	試料番号 区・層位	No. 1	No. 2	No. 3	種別個体数合計 (%)
		2 B区・Ⅳ	2 B区・Ⅳ	2 D区・Ⅳ	
二 枚 貝	ハ イ ガ イ	456 (41.30)	590 (42.57)	1,109 (69.75)	2,155 (52.82)
	シ オ フ キ	262 (23.73)	293 (21.14)	5 (0.31)	560 (13.73)
	ハ マ グ リ	113 (10.24)	149 (10.75)	258 (16.23)	520 (12.75)
	オ キ シ ジ ミ	80 (7.25)	76 (5.48)	109 (6.86)	265 (6.50)
	カ ガ ミ ガ イ	26 (2.36)	43 (3.10)	39 (2.45)	108 (2.65)
	ア サ リ	96 (8.70)	146 (10.53)	13 (0.82)	255 (6.25)
	マ ガ キ	33 (2.99)	40 (2.89)	23 (1.45)	96 (2.35)
	イ タ ボ ガ キ	3 (0.27)	1 (0.07)	2 (0.13)	6 (0.15)
	ミ ル ク イ	17 (1.54)	26 (1.88)	4 (0.25)	47 (1.15)
	マ テ ガ イ	4 (0.36)	16 (1.15)	7 (0.44)	27 (0.66)
	カリガネエガイ	2 (0.18)	0 —	0 —	2 (0.05)
巻 貝	ア カ ニ シ	2 (0.18)	0 —	3 (0.19)	5 (0.12)
	ス ガ イ	5 (0.45)	0 —	2 (0.13)	7 (0.17)
	ヘ ナ タ リ	5 (0.45)	5 (0.36)	8 (0.50)	18 (0.44)
	ウ ミ ニ ナ	0 —	1 (0.07)	1 (0.06)	2 (0.05)
	イボキシヤゴ	0 —	0 —	6 (0.38)	6 (0.15)
	ツメタガイ	0 —	0 —	1 (0.06)	1 (0.02)
試料別個体数合計		1,104	1,386	1,590	4,080

- 注 1. 本表は、2 B区、2 D区混土貝層（Ⅳ層）で実施したブロックサンプリングの試料中、標準的箇所の一部を抽出、分析した結果を示したものである。
2. 各試料の体積は次のとおりである。No.1 = 45×30×12cm。No.2 = 45×30×15cm。No.3 = 45×30×15cm。
3. 二枚貝の個体数は殻頂1個を1個体として計算した。したがって二枚の殻が接合状態を保つ例（ハイガイ・オキシジミ・ハマグリに多い）は、計算上2個体として扱うことになり、実個体数は表示した数字を下回る。
4. 本表は貝類組成のおよその傾向を示す目的で製作したものである。ブロックサンプリングの全試料については、検討完了後、別途発表する。

表4 ハイガイ、ハマグリ of 成育度の分布
 — 2A区・2D区混土具層出土例による —

ハイガイ

殻長別区分 cm	～1.9	2.0～2.9	3.0～3.9	4.0～4.9	5.0～5.9	6.0～6.9	7.0～	除 外	個体数 合 計
試料No.1 2BⅣ (%)	17 (3.73)	284 (62.28)	142 (31.14)	11 (2.41)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (0.44)	456 (100)
試料No.2 2BⅣ (%)	20 (3.39)	366 (62.03)	195 (33.05)	5 (0.85)	1 (0.17)	0 (0)	0 (0)	3 (0.51)	590 (100)
試料No.3 2DⅣ (%)	34 (3.07)	657 (59.24)	334 (30.12)	29 (2.61)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	55 (4.96)	1,109 (100)
個体数累計 (殻長区分別%)	71 (3.29)	1,307 (60.65)	671 (31.14)	45 (2.09)	1 (0.05)	0 (0)	0 (0)	60 (2.78)	合計 2,155 (100)

ハマグリ

殻長別区分 cm	～1.9	2.0～2.9	3.0～3.9	4.0～4.9	5.0～5.9	6.0～6.9	7.0～	除 外	個体数 合 計
試料No.1 2BⅣ (%)	0 (0)	0 (0)	26 (23.01)	25 (22.12)	23 (20.35)	8 (7.08)	2 (1.77)	29 (25.66)	113 (100)
試料No.2 2BⅣ (%)	0 (0)	1 (0.67)	24 (16.11)	35 (23.49)	30 (20.13)	5 (3.36)	0 (0)	54 (36.24)	149 (100)
試料No.3 2DⅣ (%)	0 (0)	26 (10.20)	83 (32.55)	21 (8.24)	11 (4.31)	3 (1.18)	1 (0.39)	110 (43.14)	255 (100)
個体数累計 (殻長区分別%)	0 (0)	27 (5.22)	133 (25.73)	81 (15.67)	64 (12.38)	16 (3.09)	3 (0.58)	193 (37.33)	合計 517 (100)

注 1. 本表は「表3」資料のうち、例数の多いハイガイとハマグリについて成育度を調査した結果である。

2. 個体の大小は殻長を基準にした。「除外」253例は、一部欠損があり、正確な計測が不可能なため一応除外したものである。

表5 2AB・2DEトレンチ出土動物遺存体

—魚類・哺乳類・鳥類—

種名		層位	第1混貝土層 II b	混土貝層		第2混貝土層 V
				IV b・IV c・IV d	IV a	
魚類	マドラトビエイ			+		
	クロダイ			+	+	
	カレイ類			+		
	ボラ				+	+
	タイ				+	
	スズキ				+	
	コチ			+		+
	エイ		+	+		
哺乳類	シカ			+	+	
	イノシシ				+	
	イヌ			+		
	タヌキ				+	
	ウマ(?)				+	
鳥類	トリの1種				+	+

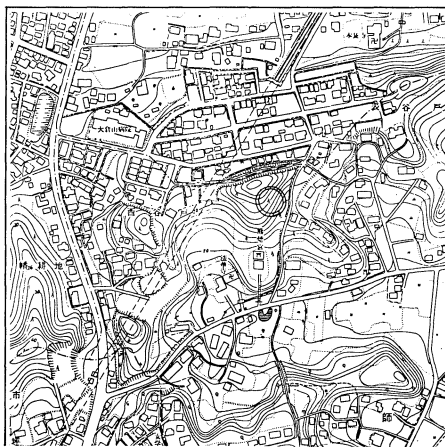
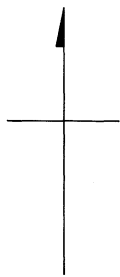
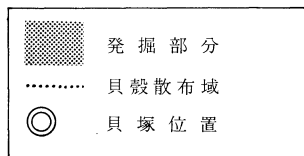
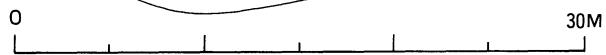
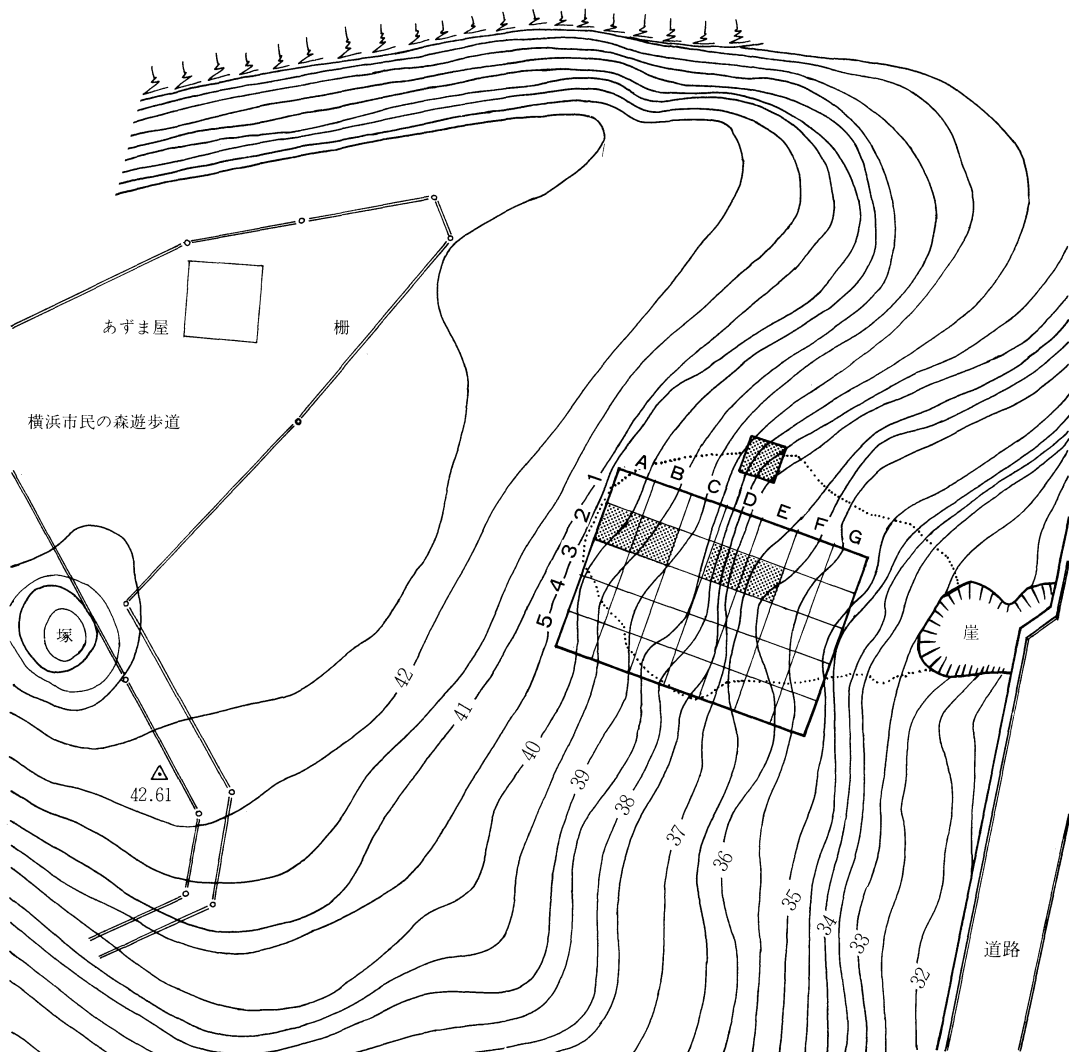
注 1. 層位欄の数字・記号は、「第3図 2AB・2DEトレンチ壁面実測図」に同じ。

2. 本表は発掘調査中に検出された種類のみを参考までに示したものである。

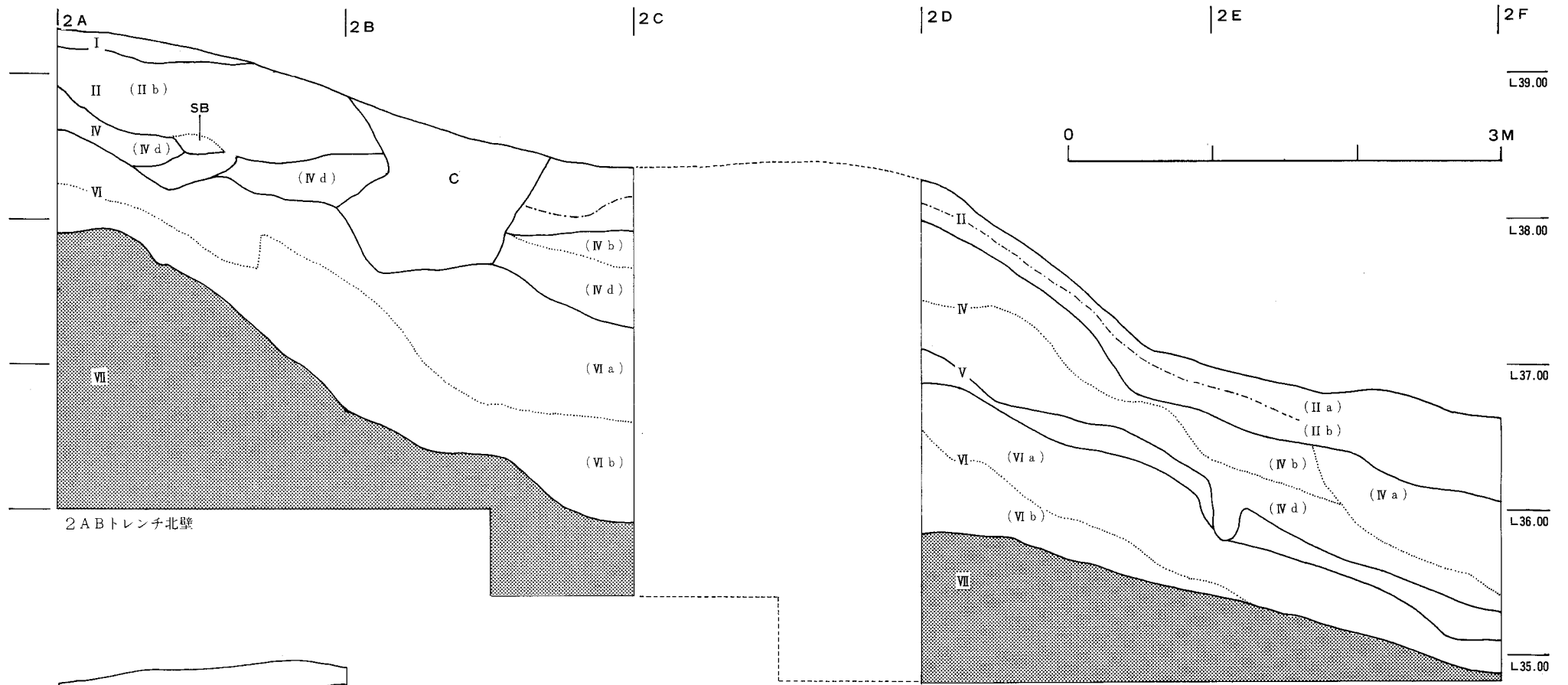


第1図 師岡貝塚および周辺主要貝塚位置図

- 0＝師岡貝塚、 1＝南綱島貝塚、 2＝峯谷貝塚、 3＝表谷東・表谷西貝塚、
 4＝菊名貝塚、 5＝駒岡貝塚、 6＝上台貝塚、 7＝梶山貝塚

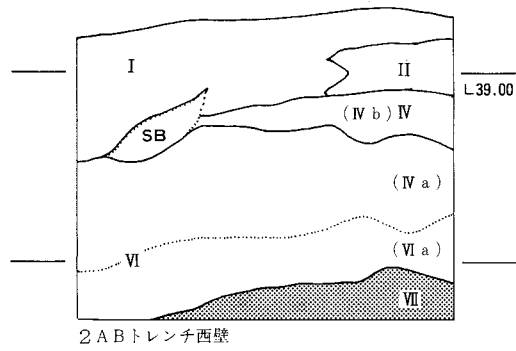


第2図 調査区域実測図



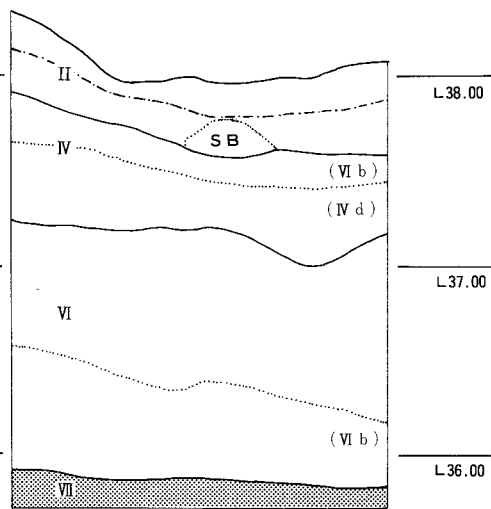
2 A B トレンチ北壁

2 D E トレンチ北壁

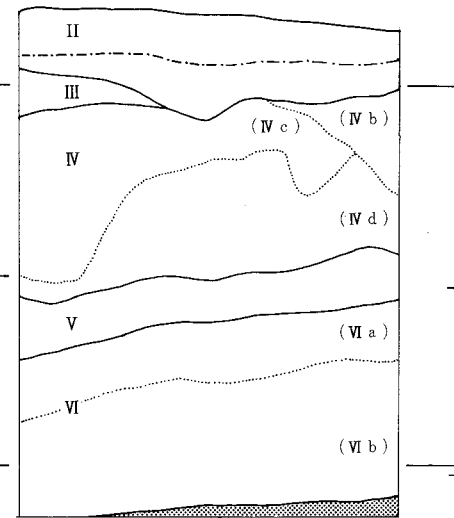


2 A B トレンチ西壁

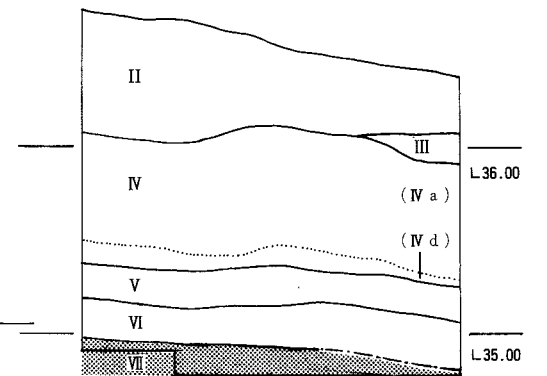
- I = 表層土
- II = 第1混貝土層…(II a・II b)
- III = 黒褐色土層
- IV = 混土貝層…(IV a・IV b・IV c・IV d)
- V = 第2混貝土層
- VI = 暗褐色土層…(VI a・VI b)
- VII = 関東ローム層
- BS = 純貝層状ブロック
- C = 攪乱箇所



2 A B トレンチ東壁

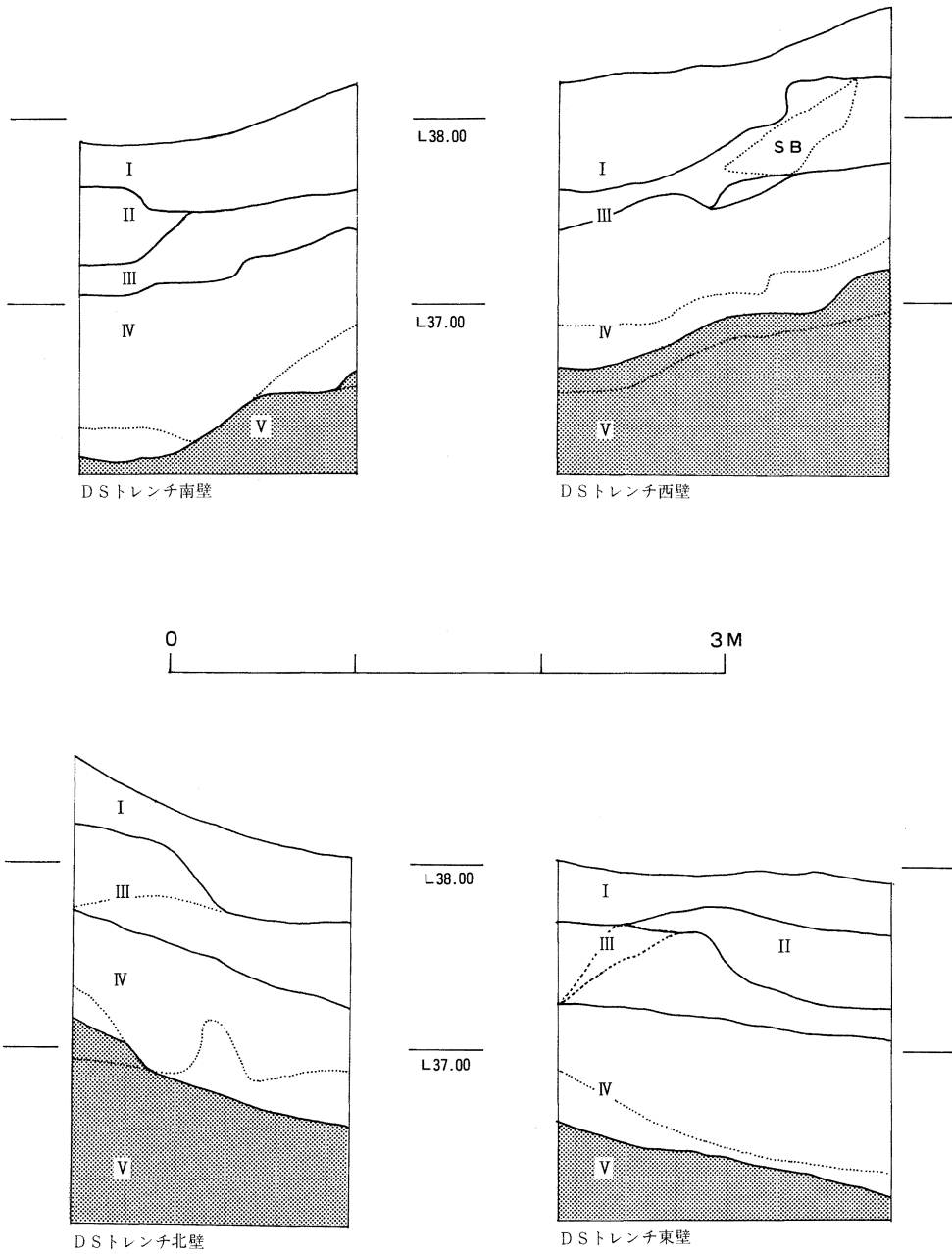


2 D E トレンチ西壁

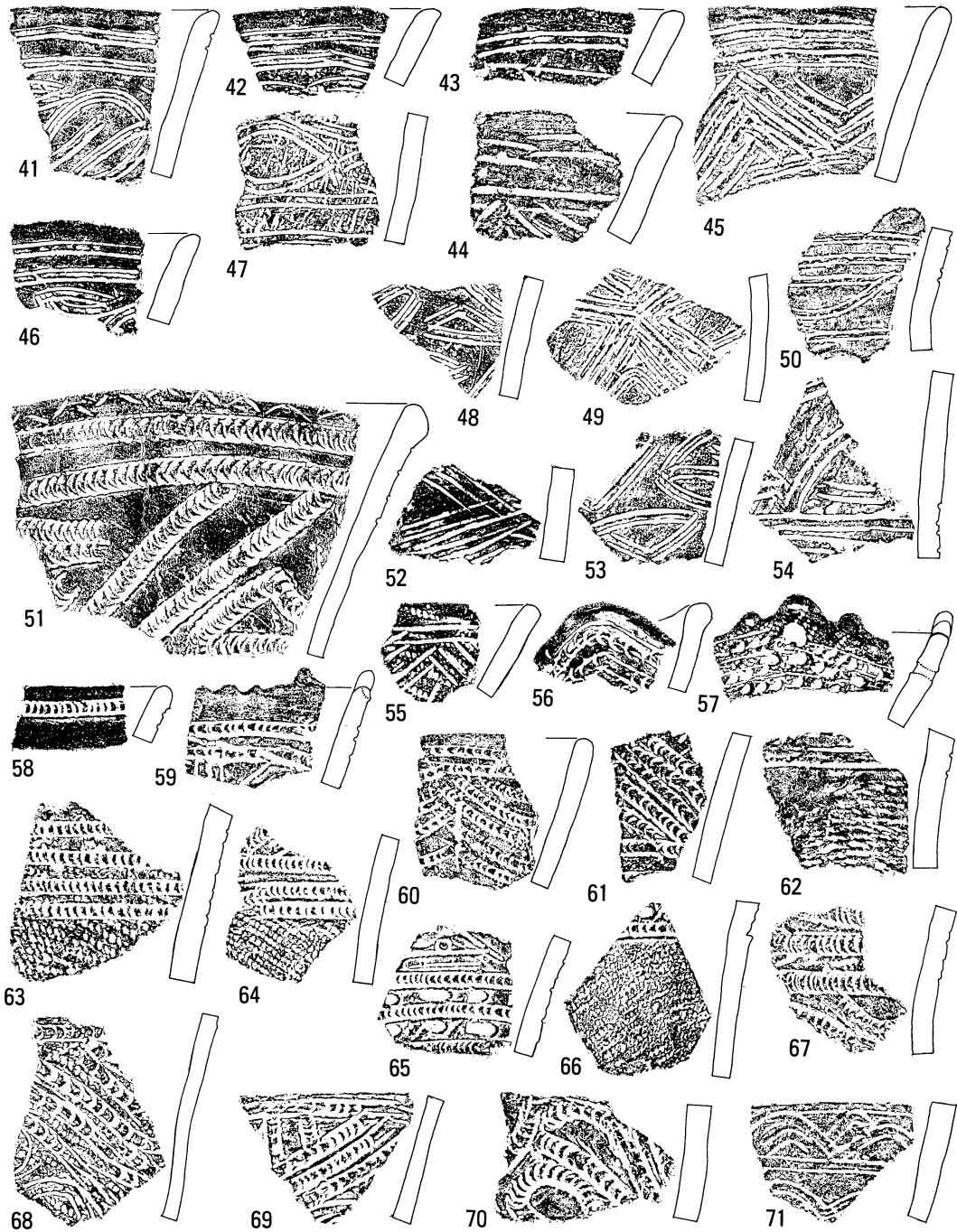


2 D E トレンチ東壁

第3図 2 A B・2 D E トレンチ壁面実測図



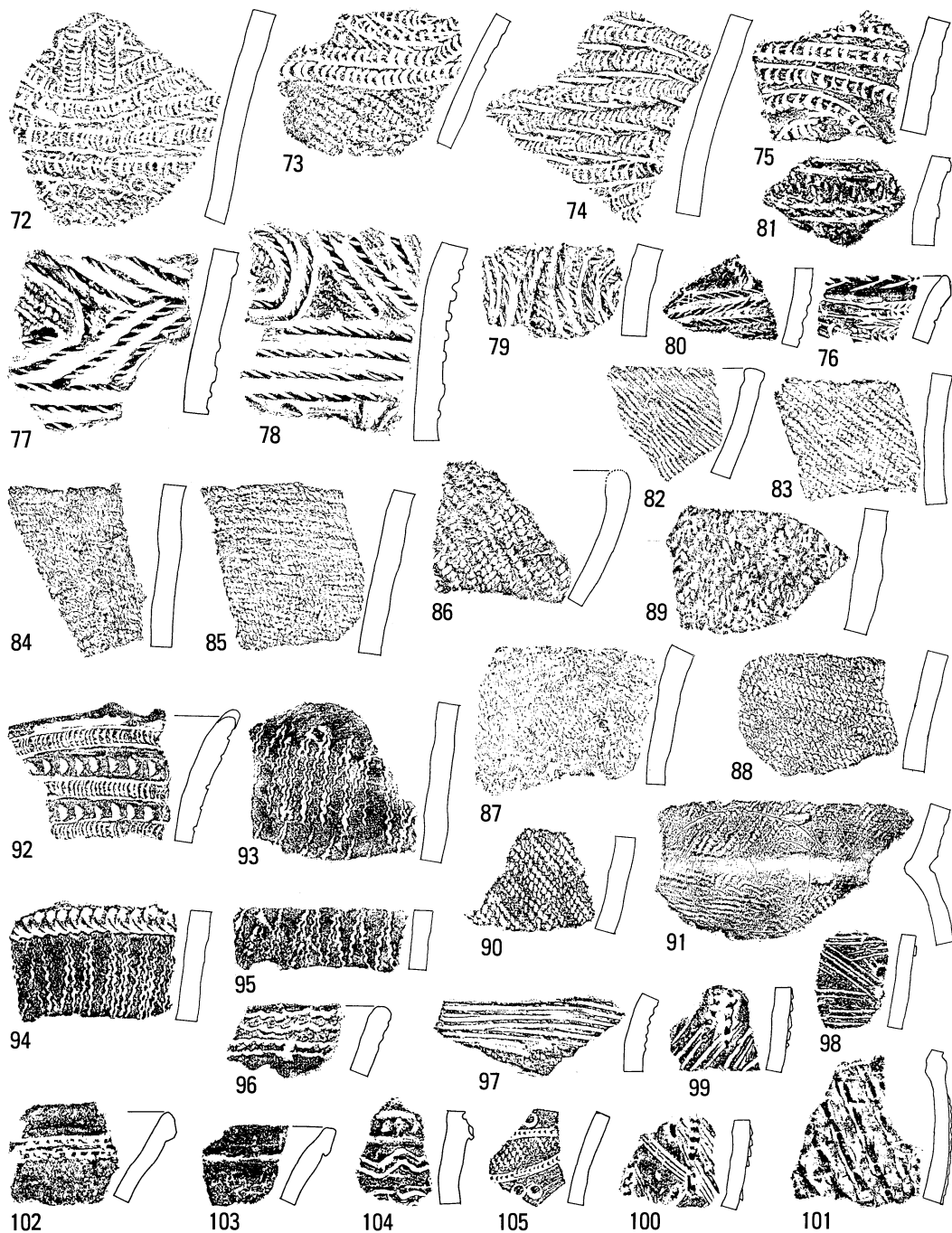
第4図 D S トレンチ壁面実測図



第5図 土器 (1)

第4類土器=41~71

(縮尺1:3) [出土層位] 2DEトレンチ混土具層 (IVb~IVd) =41~71



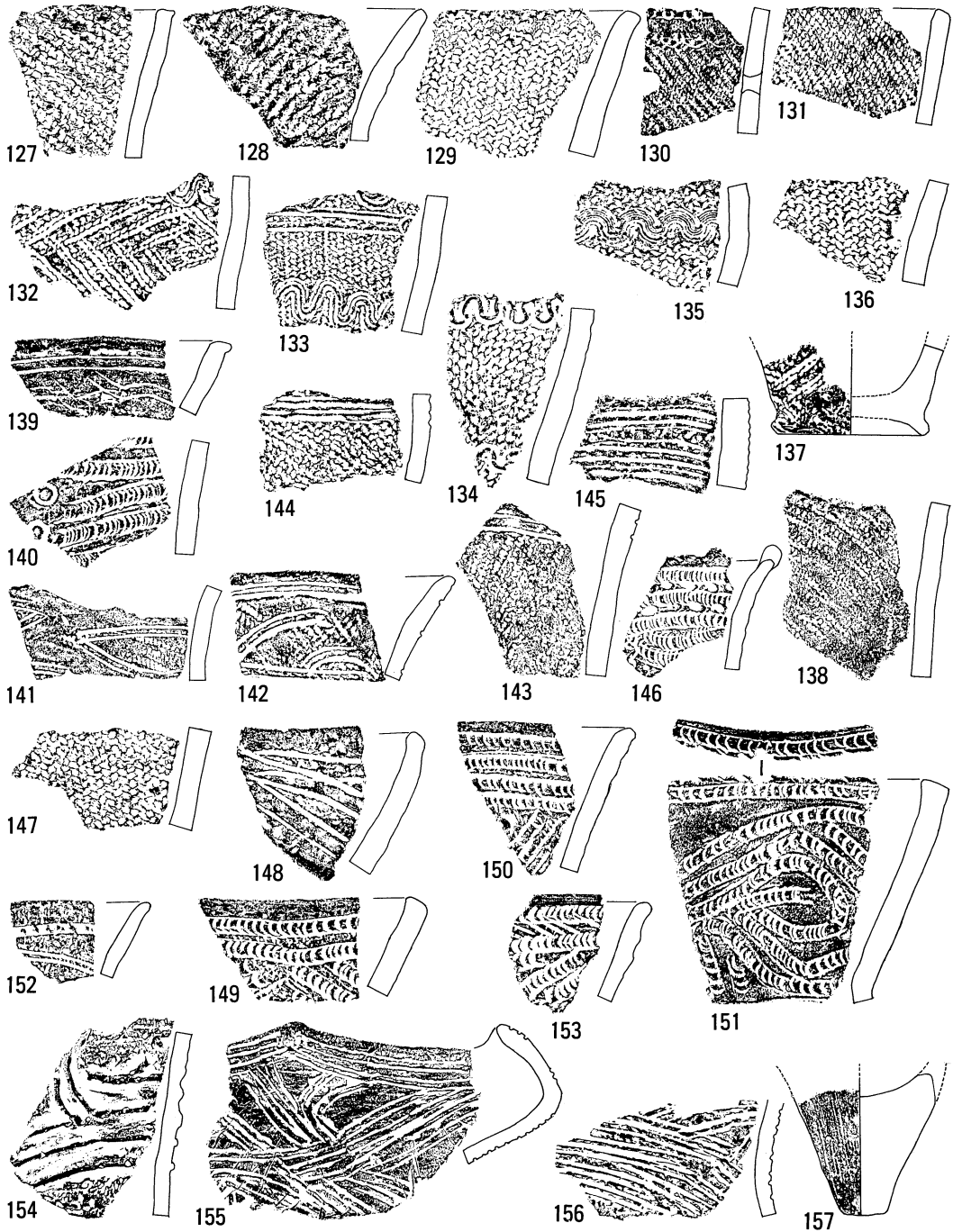
第6図 土器 (2)

第3類土器=105. 第4類土器=72~90. 第5類土器=97・98

第6類土器=92~96・99~104. 類別不詳=91

〔出土層位〕 2DEトレンチ混土具層 (IV a)=91・97・98. 同 (IV b~IV d)

(縮尺1:3) =72~96・99~104. 同 (IV d)=105



第7図 土器 (3)

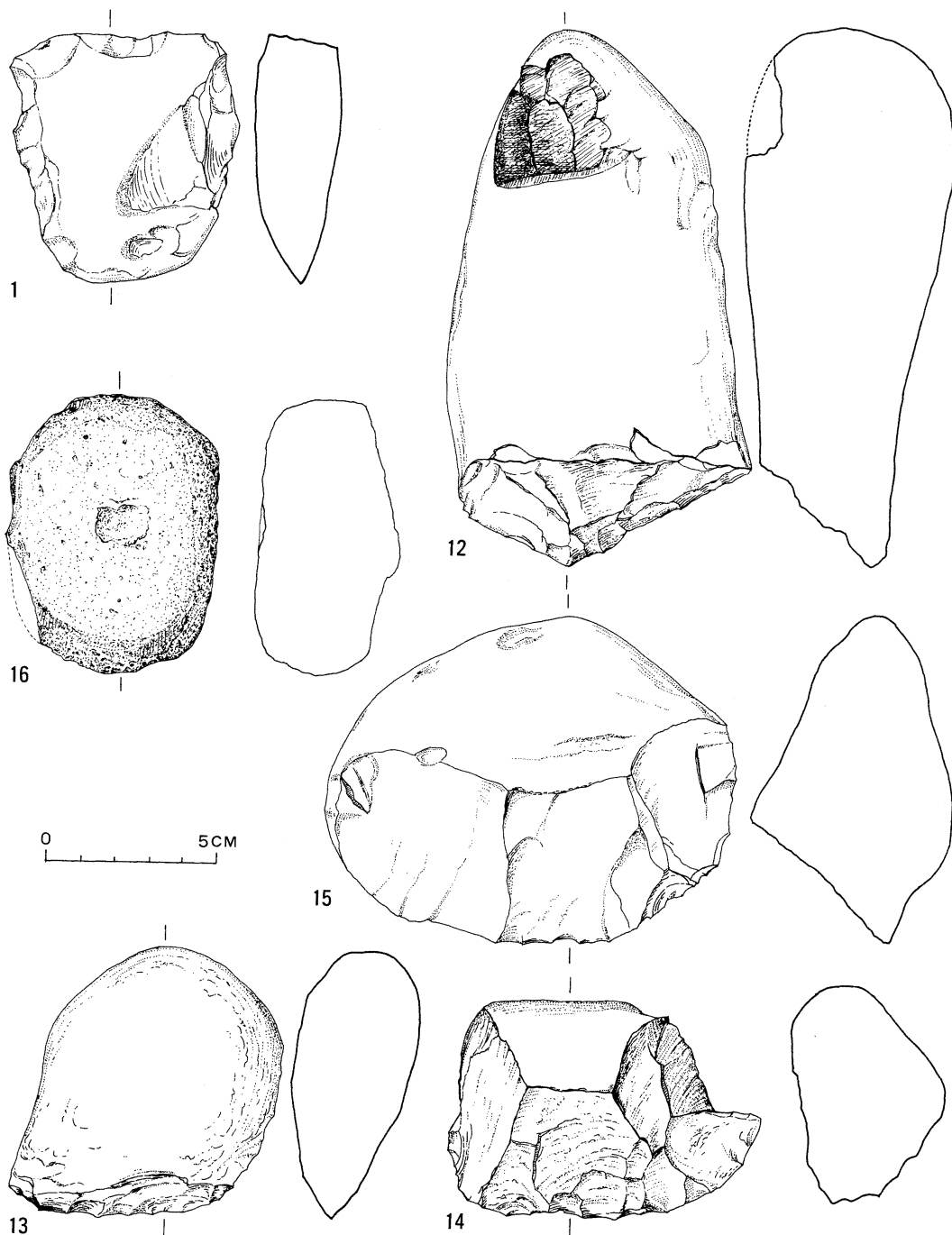
第1類土器=157. 第2類土器=127~137・144・147. 第3類土器=140

第4類土器=138・139・141~143・145・146・148~154. 第5類土器=155・156

〔出土層位〕 2ABトレンチ暗褐色土層(IV b)=157. 2ABトレンチ混土貝層

(縮尺1:3)

(IV b~IV d)=138~143・145~146. DSトレンチ混土貝層(III)=147~156



第8図

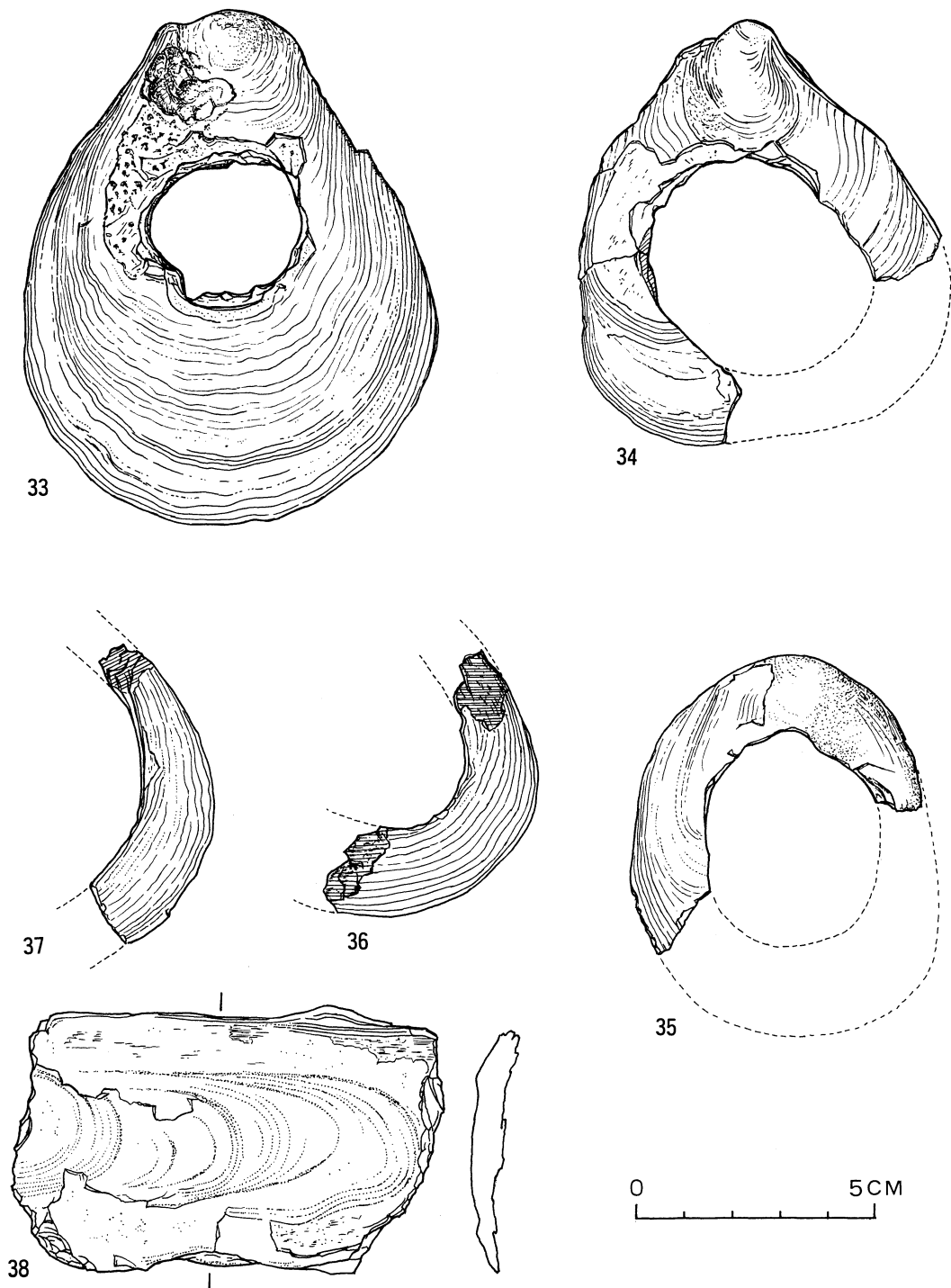
石器

局部磨製石斧=1. 礫器=12~15. 磨石=16

〔出土層位〕 2 ABトレンチ暗褐色土層 (IV a)=1. 2 DEトレンチ混土貝層

(縮尺1:2)

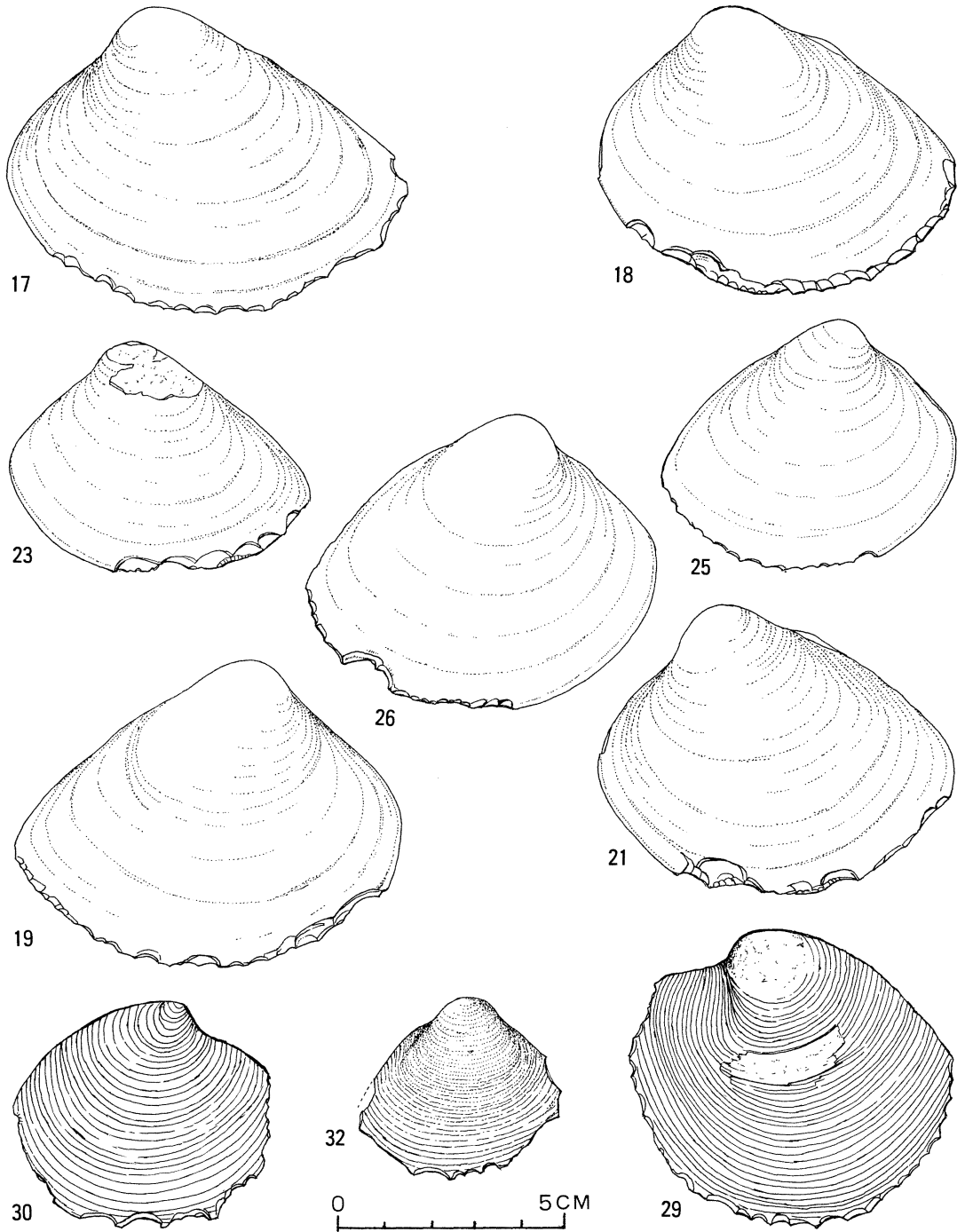
(IV b~IV d)=12~15. 同 (IV a)=16



第9図 貝製品(1)

貝輪=33~37. 貝製搔器=38.

(縮尺1:1.5)〔出土層位〕2DEトレンチ混土貝層(IV a)=33~38.



第10図 貝製品 (2)
貝刃=17~29

(縮尺1:1.5)(出土層位) 2 A B トレンチ貝層 (IV b ~ IV d) = 17・18・32. 2 D E 混土貝層 (IV b ~ IV d) = 19・21・23・25・26・29・33

昭和57年3月25日 印刷

昭和57年3月31日 発行

編集兼発行者

神奈川県立博物館長

戸栗栄次

横浜市中区南仲通5-60

印刷所 東邦印刷株式会社